水稲

出穂期以降から収穫にかかるこの時期は、美味しくて良質な米作りにおいて最も重要な時期となります。最後まで水管理や刈り取り作業を適正に行ない、品質の良い米をたくさん収穫しましょう。

★水管理

1.間断通水

中干し終了後、成熟期までの水管理で、長い湛水は避けますが稲に十分な水分を与え、根に影響のない水管理を行います。

やり方は、①浅水入水　⇒　②1～2日で自然落水　⇒　③足跡の水がなくなる～田土が白くなる直前　⇒　④浅水入水　を繰り返します。

※水不足で日割り給水時は、それに従って下さい。

2.出穂前後

出穂前後は最も水分を必要とします。通水をこまめに行い、浅水～足跡に水がたまっているくらいにします。

また、この時期には台風が来たり、フェーン現象となる日が時々あり、田んぼに水がないと稲体から水分が多く奪われ、収量・品質ともに大きく低下してしまいます。一時的に湛水し水分蒸散に備えてください。

3.完全落水

圃場がよく乾いていないと稲刈りが大変だからといって、早期に落水すると粒張りを悪くしたり乳白米や胴割れ米を発生させ、米の品質に悪影響を及ぼします。コンバイン作業に支障のない範囲で、刈取り5～10日前までは、落水しないでください。

品種別落水時期の目安

品種	落水時期(収穫前日数)
早生	5日
中生	7日
晩生	7～10日

★適期刈取りの実施

1.適期収穫

早刈は未熟粒が多くなり、収量・品質・食味を低下させます。逆に刈り遅れは、胴割粒や着色粒を多くして玄米の色沢を劣化させるなど、品質と食味低下を招きます。

昨期と品種によって収穫適期や適期幅は異なりますが、以下の視点から、総合的に収穫適期を判断して下さい。

●出穂後の日数　⇒　ハナエチゼン約32日、コシヒカリ約37日、あきさかり約41日

●登熟積算気温（出穂後の平均気温の合計）　⇒　ハナエチゼン860℃、コシヒカリ990℃、あきさかり1,070℃

●籾の色付き具合　⇒　1穂の中の青籾の割合：7粒程度

●籾水分　⇒　25%

●収穫適期幅　⇒　早生4～5日、コシヒカリ6日程度

2.収穫作業

高水分収穫はコンバインのつまりを生じるだけでなく乾燥機の稼働時間も長く、品質や食味を低下させるので避けてください。

●倒伏の激しいものや生育遅れ、穂発芽などがみられるものは、必ず刈り分けて下さい。

●コンバインで収穫後、生籾を長時間放置しておくと「焼け米」の発生につながります。収穫後４時間以内に乾燥機に張り込み、送風を開始して下さい。

★乾燥調製

●品質低下を防ぐため、急激な乾燥は避け、1時間当たりの水分減少（毎時乾減率）は0.8%以下に設定し、それ以上温度を上げないでください。

●玄米の仕上げ水分は15.0%を目標とし、過乾燥にならないよう注意して下さい。

●刈り取り時の天候により、籾水分の差が大きいことが想定される場合は、乾燥作業終了後に乾燥が進んだり、水分が戻ったりすることがないように、２段乾燥（＝水分18%程度で６時間程度乾燥を止め、調湿を行った後、仕上げ乾燥する。）を行い、籾水分の均一化を図って下さい。

●籾摺り作業は早くても乾燥終了から２～３日後とし、籾が完全に常温に戻り、水分ムラがなくなってから行って下さい。

夏秋まき露地野菜の播種

★夏秋まき露地野菜の計画的播種と害虫防除

●ダイコン・カブ・葉もの等、秋冬野菜の播種シーズンになりましたが、多品目を作られる方は、計画的かつ手際よく播種準備をして、適期の播種作業を行って下さい。

●**ネキリムシ初め、各種の土壌害虫やアブラムシ類、チョウ・ガの幼虫類が多発する恐れ**があります。夏秋まき野菜の播種、定植に当たっては必ず**土壌処理剤を散布**して下さい。

高品質ダイコンの作り方

近年、管内で収穫されるダイコンは、土壌の酸性化に伴い、微量要素欠乏による生理障害や害虫の食害等、全般に品質の劣化が目立っていますが、品質の良いダイコンを作るには次の4つがポイントです。

①根が深く伸びてから肥大するので、深耕と砕土を十分行い、均一な耕土を作ること

②間引きが遅れると、根の肥大が著しく悪くなるので、間引きは適期に行うこと

③基肥の多施用を避け、生育中期から後半にかけて追肥で生育を調節すること

④石灰の多施用は避け、土壌pHはやや酸性の6.3～6.5に維持すること

★圃場準備＝有機質資材の施用

播種予定日の2週間前までの土壌が乾燥した日に、**堆肥、石灰質資材**を全面に施用し、**根を深く伸長させるために、トラクターでゆっくり耕耘、深耕**し、作土をできるだけ深くして下さい。

★基肥施用

播種予定日の1週間前までに、**あさひを60kg/10a**、微量要素補給のため**F.T.Eを4kg/10a**全面施用し、トラクターで耕耘後、**そさい5号20kg/10a**を表層施用して下さい。

なお、畝立ては、排水の良い圃場では2条播き、水はけが劣る圃場では1条播きとし、**畝高は最低30cm**として下さい。

★害虫防除用土壌処理剤の施用

最近、ネキリムシ、タネバエ、キスジノミノハムシ等、土壌害虫が多発し、根部の食害跡が目立っていますが、これら土壌害虫類の防除のために、**畝立て前にフォース粒剤を6～9kg/10a**全面施用して下さい。

★播種と間引き

播種は、発芽揃いを良くするため、土壌の表面が膨軟で湿っている畝立て直後に行い、間引きは3回に分けて、土の表面が乾いている晴天時に行って下さい。

・播種間隔　：　**1条播きの場合＝25cm**
　　　　　　　2条播きの場合＝30cm×25cm
・播 種 期　：　**8月20日～9月10日**
・播 種 量　：　1穴当たり4～5粒
・間引き時期　：　1回目＝本葉が1～2枚の頃に3本にする。⇒子葉がハート型で、左右の大きさが揃ったものを残して下さい。
2回目＝本葉が3～4枚の頃に2本にして下さい。
3回目＝本葉が6～7枚の頃に1本にして下さい。

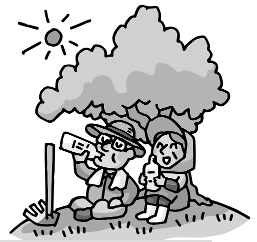
果　樹

★温州ミカンのハダニ類の防除

常時、園内を見回り、ハダニ類発生の有無（葉がカスリ状になっていないか）を観察し、発生がみられたら早期防除を行って下さい。薬剤は**ダニトロンフロアブルの2,000倍またはサンマイト水和剤3,000倍液を交互に使用**して下さい。

★仕上げ摘果の早期実施

着果量が多いと、S級中心の果実しか生産されず、さらに来年の着花量が極端に不足します。園内を見回り、着果量の多い樹は今月中旬までに**仕上げ摘果を実施**して下さい。



暑い日が続きます。万全の熱中症対策をとって、農作業を行って下さい。

あなたもチャレンジ!―家庭菜園

ハクサイ　病害虫の予防を万全に

園芸研究家●成松次郎

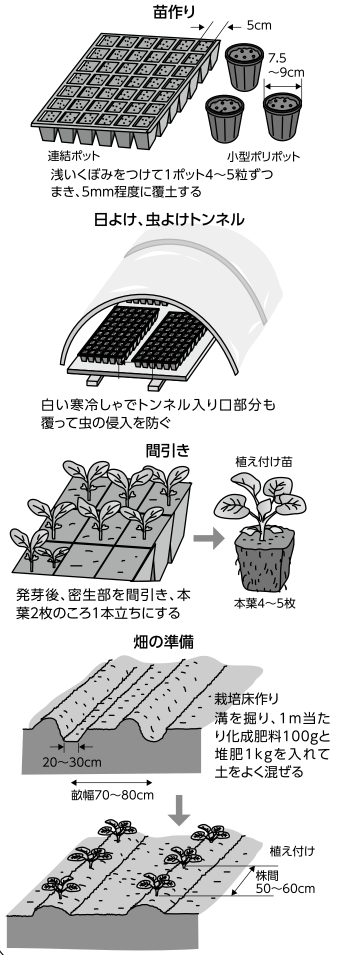
ハクサイの原産地は中国。日本に本格的に導入されたのは明治初年と意外にも新しい野菜です。生育適温は15～20度の冷涼な気候で、寒さに強い冬の代表野菜です。

8月中旬～9月上旬にまき、早生種で種まき後60～70日、中生種で80～100日で収穫できます。

[品種]漬物、鍋物用には大型の品種が主流ですが、小型品種もあります。年内取りは、早生品種の「晴黄65」(タキイ種苗)など、中生品種では、黄芯系の「黄ごころ85」(タキイ種苗)、「黄将」(カネコ種苗)など、また、重さ600gくらいの「娃々菜」(トキタ種苗)、「タイニーシュシュ」(サカタのタネ)などがあります。

[苗作り]連結ポットなどに3～4粒まき、途中、間引きをして1株にし、本葉4～5枚の苗に仕上げます。ネットでトンネル状に覆うなどして、虫の侵入を防ぎます。

[畑の準備]植え付け2週間前までに1平方m当たり苦土石灰100gを散布し、土とよく混ぜておきます。1週間前までに畝幅70～80cm、深さ20cmの溝を掘り、溝1mにつき化成肥料(N-P-K=10-10-10%)100gと堆肥1kgを入れ、土とよく混ぜて畝を作ります。ウイルス病を媒介するアブラムシの飛来を防ぐには、白や銀色の反射性マルチフィルムを使うと効果的です。



[植え付け]植え穴は50～60cm間隔に掘り、畑が乾いていたら穴に水やりをしておきます。植え付けの深さは、子葉の下までの深さになるようにし、株元の土を手でしっかり押さえます。

[追肥]本葉10枚のころ畝の肩に化成肥料を1株10gくらいまいて、株元に土寄せします。2回目はその20日後に通路にまき土寄せします。

[病害虫の防除]ヨトウムシ、コナガ、アブラムシなどが多いので、オルトラン水和剤などで駆除します。病気の予防には、管理のときに葉を傷めないことですが、軟腐病では発病株を早めに除去し、広がりを防ぎます。

[収穫]結球の頭を押さえて、葉に緩みがなく、しっかりしたら収穫時期です。